



庭前小景 1931

・絹本彩色・二曲屏風一隻・166.1×172.8cm・第12回帝展

森田 沙伊 (もりた さい) 1898—1993

北海道に生まれる。本名才一。1917年東京に転居し川端画学校に学ぶ。1923年東京美術学校日本画科卒業。1928年第9回帝展に初入選、以後官展を中心に作品を発表。享年95歳。帝展入選後、本作のような農村の情景を主題に取組んでいた。唐箕の前でランプを磨く手を休めて、おしゃべりに興じる二人の女兒を描いている。が、犬や燕、団扇に下駄が配置され、鮮やかな日傘が描かれるなど、モダンな演出がされている。この頃の沙伊の作風を良く伝えている。

佐久市立近代美術館開館三十周年記念

所蔵名品選

〔時代 明治・大正・戦前昭和期
1868—1945〕

平成25年12/14(土)～平成26年2/23(日) 開館時間：午前9時30分～午後5時

【休館日】毎週月曜日(12月23日・1月13日・2月10日・2月17日は開館) 年末年始(12月28日(土)～1月3日(金))

【観覧料】一般 500円(400) 高校・大学生 400円(300) 小・中学生 250円(200) ※()内は20名以上の団体料金

佐久市立近代美術館
油井一二記念館

SAKU Municipal
Museum
of Modern Art since 1983

佐久市立近代美術館 油井一二記念館 〒385-0011 長野県佐久市猿久保 35 番地 5 TEL:0267-67-1055 / FAX:0267-67-1068
E-mail:s-kinbi@city.saku.nagano.jp URL http://museum.city.saku.nagano.jp/

●主催：佐久市・佐久市教育委員会

佐久市立近代美術館開館三十周年記念

所蔵名品選

〔時代〕 明治大正戦前戦後 1868—1945

佐久市立近代美術館は昭和 58 年（1983）に開館し、平成 25 年（2013）5 月 26 日に開館 30 年を迎えました。これを記念して、美術品が制作された年代順で構成した収蔵品展を 3 会期に分けて開催しています。

第 2 会期は明治以降昭和初期までの変革の時代の作品で構成します。

急速に近代化する日本の中で、伝統的な美術や工芸は、美術という概念に統一されました。体系化された中で、美術家たちも方向性を模索し、離合集散をくりかえし、時代の要請に応じていきました。また、四度の戦争にも無関係ではいられませんでした。世界と日本の関係が大きく変化の中で創造された作品です。

【展示作家】

有島生馬・猪飼嘯谷・池上秀敏・今村紫紅・岡村政子・奥谷秋石・梶田半古・加藤陽・川崎小虎・川村曼舟・菊池契月・菊池芳文・北村西望・木村武山・神津港人・小杉放菴（未醒）・児玉果亭・児玉希望・小松均・小室翠雲・小山大月・澤田政廣・下村観山・竹内栖鳳・谷口香嶠・徳力富吉郎・中村貞以・西川春洞・西村龍介・野田九浦・野村正三郎・平福百穂・前田青邨・松林桂月・源川雪・森田沙伊・山川秀峰・山口華楊・山元春挙・結城素明・横山大観・吉岡堅二・渡辺省亭

【会期中のイベント】

○ 展覧会ガイド 美術館スタッフが展覧会を案内

日時：12月22日(日)・1月18日(土)・2月2日(日)・2月22日(土)
各日午後2時～(40分程度)

場所：佐久市立近代美術館

【同時開催】

○ 佐久市立近代美術館友の会会員展

12月15日(日)～12月23日(月) (最終日は午後3時まで)

○ 佐久平の美術展受賞者展 (平成24年度受賞者による)

12月21日(土)～平成26年1月13日(月)

○ 児童生徒写生大会作品展

12月21日(土)～平成26年1月13日(月)

○ 迎春テーマ展示「馬」

平成26年1月4日(土)
～13日(月)

○ 佐久平の美術展

平成26年2月8日(土)
～2月23日(日)

○ 児童生徒美術展

平成26年2月15日(土)
～2月23日(日)



交通：長野新幹線(佐久平駅)からタクシーで約10分
JR小海線(北中込駅)から徒歩約15分
上信越自動車道(佐久I.C.)より約15分

佐久市立近代美術館
油井一二記念館

SAKU Municipal
Museum
of Modern Art since 1983

佐久市立近代美術館 油井一二記念館

〒385-0011 長野県佐久市猿久保 35 番地 5 TEL:0267-67-1055 / FAX:0267-67-1068
E-mail:s-kinbi@city.saku.nagano.jp URL http://museum.city.saku.nagano.jp/

●主催：佐久市・佐久市教育委員会



① 大楠公 1941

・絹本彩色・額装・262×177cm・第4回文部省美術展

② 児玉 希望 (こだま きぼう) 1898—1971

広島県高田郡で生まれ、東京都で歿。享年72歳。本名省三。若くして上京、川合玉堂の門下となった。1921年第3回帝展で初入選、以後官展を中心に活躍。1952年から約1年間滞欧している。足利尊氏が海路から、直義が陸路から京に進軍。対する後醍醐天皇勢は新田義興が和田峠、楠正成が淡川で迎え撃つが、700騎余りの正成軍は奮戦むしく、50万の直義軍に追い詰められた。右の正成は自害を決意、左は弟の正季だろうか。馬は既になく、服装は乱れ、刀は刃こぼれをおこしている。白地の背景は戦場の緊張感を感じさせ、白描画により高貴な雰囲気を感じながらも、決意の表情を見ることが出来る。



③ 柿若葉の頃 1945.7.1

板 / 油彩・27×21cm

④ 有島 生馬 (ありしま いくま) 1882—1974

神奈川県横浜市生まれ、神奈川県鎌倉で歿。享年91歳。本名壬生馬、号十月亭。兄武部、弟里見尊と共に文芸家として著名。初めイタリア文学を志し1904年東京外国語学校イタリア語科を卒業した。絵画に転じて藤島武二に師事、1905年渡欧、セザンヌに感銘を受ける。1910年の帰国後は雑誌「白樺」で西洋美術の紹介に努めた。1913年第7回文展に入選、1914年2科会創立に参加、1936年一水会結成。戦後は日展にも出品した。日本ペンクラブ創設時副会長。広い見識から多方面で活躍し、鑑賞眼と経済力で不遇な画家関根正二、長谷川利行などを援助した。著書も多く「有島生馬全集」3巻などがある。生馬は1945年6月に長野県南佐久郡田口村に疎開、後に同郡野沢町に移り、佐久を題材にした作品を描いた。物質、食糧に乏しく生活が苦しい時であったが、高原の眩い光が「柿若葉の頃」などの作品に表れている。戦中疎開時の貴重な一点。1957年夏に鎌倉に転居。



⑤ 豊穣 1929

・カンヴァス / 油彩・130.3×97cm・第3回構造社展

⑥ 神津 港人 (こうづ こうじん) 1889—1978

長野県北佐久郡志賀村の豪農神津豊助の次男に生まれ、東京都で歿。享年88歳。本名港人(みなと)。中学時代、丸山隆麿の指導を受けたという。1907年東京美術学校西洋画科に入学。卒業後、光風会、文展に出品。1920年農商務省商業美術研究生として渡欧、1922年帰国。1928年東京美術学校同級生で彫刻に転身した斎藤素蔵に誘われ構造社の絵画部部長として出品。脱退後は自ら主宰した緑蔭会、創芸協会、第一美術協会などに作品を発表した。外光派的写真からイギリス留学の後の裸体による構想画、自然主義的風景画を経て晩年の印象派的な諸作品へと展開したが、時流を追わず、豊かな色彩感覚をもって誠実に自己の画業を貫いた。本作は構想画時代の代表作。画面には豊かに実った秋の味覚があふれ、喜びをたたえた若い男女が戯れている。モデルは日本人だが、男性の目がデフォルメされており、画題を象徴するかのような半神半人であろうか。展覧会開会前に、腰布が描きこまれたことも添えておく。



⑦ 伐木 1938

・紙本彩色・額装・102×123.4cm・第2回大日美術院展

⑧ 結城 素明 (ゆうき そめい) 1875—1957

東京市本所区で生まれ、東京都文京区で歿。享年82歳。本名貞松。1891年川端玉章の天真画塾に入塾、1892年東京美術学校日本画科に入学。卒業後は西洋画科で学んでいる。1900年福井江亭、平福百穂などと自然主義を標榜し死声会を創立。日本美術院の理想主義、浪漫主義とは一線を画し制作する。官展、金鈴社等に出品をつづけた。「伐木」は、1937年に素明、川崎小虎、青木大乗によって創立した大日美術院展に出品。新しい日本画の創造を追い求めるなか、素明は新しい題材として労働に関心を寄せた。背景の南面風、印象派風の点描は視覚的には空間の奥行きに欠けるが、労働者の姿に正面から挑んだ本作は、単純な風俗画ではない。薄雲に肥瘦のある柔らかな描線で描いた樵の、年季の入った斧の音が実感として画面に響いている。



⑨ (作品名不詳・婦人像) 1897.9.1

・多色刷石版・54.5×39cm

・時事新報第5000号付録・画作者：岡村 政子

⑩ 岡村 政子 (おかむら まさこ) 1858—1936

山室直高とさだの四女として江戸で生まれる。信濃若村田で育つ。1874年上京し、日本ハリス協会の神学校に学び、1875年に洗礼。1876年工部美術学校第一期生として浅井忠、フォンターネに学ぶ。フォンターネの補綴に端を発し多くの学生が退学する中、政子も後に退学。1880年同郷(高瀬村)で福沢諭吉に学んだ岡村竹四郎と結婚。1882年信陽堂石版印刷所を創業、文部省第一号検定教科書「普通小学算学階梯」などを出版。その原画を政子が手掛けた。この時代の石版画は、歴史、風景、風俗、人物を題材にし、江戸時代に成立した錦絵と同様の民衆文化で、西洋画の技法を駆使した表現と近代的な印刷技術で人気を博した。写真や印刷技術の発達とともに石版画は版画技法の1つとなった。また、福沢諭吉との関係から時事新報の付録の制作・印刷を請け負った。

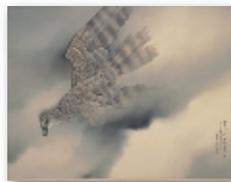


⑪ 林亭の朝 1930

・紙本墨画淡彩・二曲屏風一隻・各147.5×159cm

⑫ 横山 大観 (よこやま たいかん) 1868—1958

水戸藩士酒井捨彦の長男として茨城水戸に生まれ、東京都で歿。享年89歳。本名秀徳。1878年一家で上京。1888年母方の姓をついで横山となる。1889年、新設の東京美術学校に入学。1896年東京美術学校助教となるが、校長岡倉天心排斥の内紛に列して1898年辞職。日本美術院の創立に参加した。理想主義を掲げ、自然を純化するなど新しい日本画創造に尽力した。1903-05年には海外に視察。1914年には日本美術院を再興した。近代日本画界の第一人者であった。松林の中に立つ一軒の「林亭」。空に淡く刷いた金泥は、明けぼかりの朝。朝陽がまだ曙れる前、一羽の鳥が飛び去っていく。鑑賞者の関心を画面の外に導いていく。



⑬ 威振八荒図 1944.11

・絹本墨画淡彩・掛軸装・85.7×109.7cm・戦時特別展

⑭ 松林 桂月 (まつばやし けいげつ) 1876—1963

山口県萩で伊藤篤一の次男として生まれ、東京都で歿。享年87歳。本名篤。1893年上京し野口園谷に師事。1898年松林孝子と結婚し松林姓を継ぐ。はじめ日本美術協会展、後に文展に出品。近代南画を代表する画家の一人。八荒は八紘に通じ、全世界を一つにすることを意味する「八紘一宇」にも因み、1944年の戦時特別展に出品され特別な意味を負われた。急降下する霧に焦点を合わせると、雲は素早く右上方に流れていく。眼光鋭く力強く描かれた霧は獲物を捕えようとしている。「威振八荒図」は霧や塵を描く画題として実はその作例も多く、桂月も1927年の第8回帝展出品作がある。